

特集 うつ病診療における治療脱落を考える

うつ病診療における治療脱落を考える

石郷岡 純

本シンポジウムは平成23年10月27日、石郷岡と藤田保健衛生大学・岩田仲生先生の2人の司会で開催された。この企画の狙いは、現実のうつ病治療は必ずしも目標である寛解が高い率で達成されているわけではないこと、その理由のひとつとして治療からの脱落率がかつて信じられていたよりもはるかに高いことが明らかになってきたことから、治療脱落がうつ病診療に及ぼす影響、脱落率を低減させるための方略を議論し、この問題の認識を鼓舞することにあった。また、一方では治療の終結に関して明確な指針はなく、脱落の理由も様々であることが考えられるため、治療継続の実態も明らかにする狙いもあった。

帝京大学溝口病院の張賢徳先生は、自殺者のうつ病治療が不十分であった可能性があることを指摘し、自殺予防の観点から脱落の重要性について議論が行われた。また、改善による治療脱落であったとしても、その後の再燃・再発はあり得るので常に治療脱落を念頭に置いた心理教育が必要であると述べた。自殺は必ずしも重症者にだけみられるのではなく、いわゆる「軽症者」、あるいはうつ病ではないがうつ状態であるものに対しても留意すべきであると指摘した。この問題に対処するためには、医療者が電話によるアプローチをすることも1つの方法であるという提案もなされた。近年の自殺者の高止まりの傾向は社会問題にもなっており多くの提言がなされているが、治療脱落に視点を置くことも重要な対策の1つであること

が改めて認識されることになった。

メープルクリニックの佐藤啓二先生は、うつ病治療の最前線である診療所における治療脱落の実態を報告した。詳細な数字は発表者から別に述べられるので省略するが、比較的若年の患者、軽症者に多いなど、患者の属性との関連があることが示唆された。また受診後早期に脱落するものも多く、うつ病患者の受診率は上がっていると言われているものの、継続性という面では十分でない一群が存在し、治療成果という受診者数には反映されない質の面での問題点が存在することが示唆された。この点に関して、佐藤先生からはファースト・コンタクトの重要性が強調された。

藤田保健衛生大学の岩田仲生先生は、レセプトデータ、インターネット調査からの解析結果が紹介された。近年増加している報告と同様、治療開始後継続率は速やかに低下し半年後では30%程度まで低下していたという驚くべき実態が改めて明らかになった。中断は自己判断であることが多く、その理由も多彩であるが、初期には副作用が、その後は改善したと考えている場合が多いとのことであった。また服薬に懐疑的であるものも少なくないようである。このことから、治療計画を示すことを含めた心理教育が治療継続のために重要であることが指摘された。

NTT 東日本関東病院の秋山剛先生は、うつ病者のリワーク事業に取り組んできた経験から、プログラムからの脱落など復職に至らない人にみら

第107回日本精神神経学会学術総会=会期：2011年10月26～27日、会場：ホテルグランパシフィック LE DAIBA, ホテル日航東京

総会基本テーマ：山の向こうに山有り、山また山 精神科における一層の専門性の追求

シンポジウム うつ病診療における治療脱落を考える 座長：石郷岡 純（東京女子医科大学医学部精神医学教室）、岩田 仲生（藤田保健衛生大学医学部精神神経科学） コーディネーター：石郷岡 純

れる類型として、生活リズムの問題、対人緊張感の強さ、身体化・回避傾向、軽躁状態や人格傾向による集団行動の困難さ、プログラムに対する過度の依存、キャリアを変えたいという願望などをあげた。また、そこには狭義の治療論だけでなく、価値観も含めた倫理的な考察も必要であることを指摘した。

本シンポジウムには多数の参加者を迎えること

ができ、この問題に関する関心の高さが窺えた。そこで明らかになったことは、うつ病治療の中断率が高いことが明確になったこと、そこに関与する因子はきわめて多彩であることを認識し、包括的な治療戦略が必要であることであった。単純な治療論ではなく、生活者としてのうつ病者をみていくという姿勢が重要であることが改めて明らかになったといえよう。
